

# トヨタ財団レポート

THE TOYOTA FOUNDATION REPORT

〒163-0437 東京都新宿区西新宿2-1-1

新宿三井ビル37F

Phone: 03-3344-1701(代)

Fax: 03-3342-6911

URL <http://www.toyotafound.or.jp>

No.93

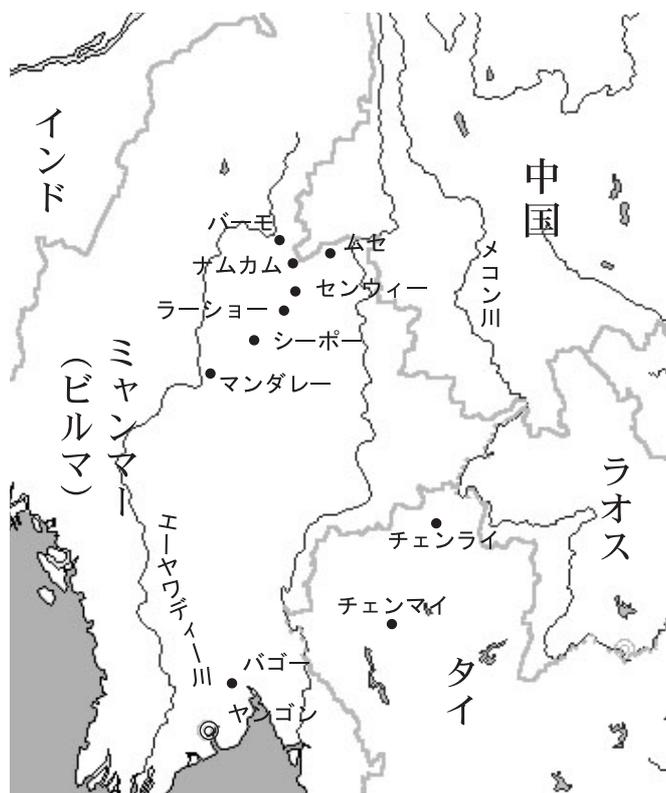
Nov. 2000

## 北タイ研究者によるミャンマー(ビルマ)・シャン州野外調査から

「シャン年代記」研究をめざして



レーヌー・ウィチャーシン  
(チェンマイ大学人文学部)



訳者解説：レーヌー・ウィチャーシン講師は、チェンマイ大学に勤める女性研究者である。レーヌー講師は、ミャンマー(ビルマ)からインド・アッサムにかけて居住するタイ系諸族の用いる古文書解読を専門とし、かつてアッサム東部に存在したアーホム王国の年代記『アーホム・ブランジー』を読み解いた業績で、タイ国立調査研究評議会最優秀研究賞を受賞している。現在は、ミャンマー(ビルマ)・シャン州北部に栄えたタイ系ムンマオ王国の年代記である『シャン年代記』の解読作業に取り組んでいる。その過程で、レーヌー講師は、ミャンマー・シャン州で野外調査を行った。その目的は、ご自身も述べられているように、『シャン年代記』を読み解く手がかりを地元の民間研究者から学ぼうというものである。また、それと共に、ミャンマーのタイ族研究のさきがけをなした女性研究者バンチョップ・バンメーター博士が40年以上前に行った野外調査の足跡を偲ぼうという想いもこめられている。バンチョップ博士は、レーヌー講師にとって直接の師に他ならない。下記はその野外調査行の報告書である。

一方、レーヌー講師の直接のねらいを越えて、この報告書には鮮やかな発見がある。それは、ミャンマー族中心の国家ミャンマー内部に張り巡らされているタイ系シャン族の文化的ネットワークとそれを支えるインフラストラクチュアがここに明瞭に記録されている点である。ヤンゴンをはじめとする各地に、シャン文化協会が存在し、ミャンマー当局の監視下でありながらもシャン語書籍を刊行する出版社まで活動しているという。さらに、ミャンマー第二の都市マンダレーには、16～18世紀の戦役で歴代のミャンマー王朝による侵攻の前に膝を屈したタイ・アユタヤ朝の虜囚の遺民が、今もヨディア人という独自のアイデンティティを守っている。また注目に値するのは、各地で相当数数のシャン族出身の民間研究者が郷土史や郷土文化についての研究を行っている事である。このような人々が培ってきた土着の知的伝統がどのようなものであるのか興味深い。いずれは彼らの研究も支援される事が望まれる。さらにいえば、このようなネットワークは、今後のミャンマー社会の動きに

何らかの影響を与えられると思われる。このシャン族の文化的ネットワークの存在は、これまで日本では知られる事が少ない。この意味で下記報告書を紹介する意義があるだろう。

#### 北タイ研究者によるミャンマー (ビルマ) シャン州野外調査から シャン州調査の目的

2000年4月1日(土)から20日間にわたって、筆者をはじめとする3名の調査団は、ミャンマー・シャン州北部へ調査旅行を行った。一つの目的は、シャン州北部に住む民間のタイ系郷土研究者に取材を行うためである。いまひとつの目的は、タイ研究の先駆者である女性研究者バンチョップ・バンメーター博士の足跡をたどることである。シャン州に存在したタイ系の小王国の文書を現地調査するために、1958年にバンチョップ博士は、同地のタイ系の村々を旅した。私たちは、各地の古老のバンチョップ博士についての記憶も尋ねたかった。

私たちがとったルートは、ヤンゴン(ラングーン)からマンダレーへ北上し、それから道を北東に取り、ピン・ウー・ルイン(メーミョー)へと向かう道である。そして、シャン州へ入り、キャウクメー、シーポー、ラーショー、ムセ、チェラン、それからナムカムへと抜ける。それから、筆者は、雲南省の端麗へと国境を越えて入る機会を得た。19日間の旅中、私たち一行は車を借り上げて移動したため、関心のある地域に自在に立ち寄ることができた。その反面、狭く、穴だらけで、その上傷みがひどいミャンマーの道路のために、余計な時間を取られることになる。ミャンマー当局は、道路のメンテナンスを中国系の企業に行わせているのだが、なぜこ

のように道路の状態が劣悪なのかと不思議になるくらいである。おまけに、北上するハイウェイの通行料は高い。

ミャンマー政府の規制により、一般観光客はラーショーまでしか入ることができない。ラーショーより先に進もうとすれば、事前に当局から許可を取り、チェックポイントで許可証を提示する必要がある。しかし、それには時間がかかる。ミャンマー政府系の旅行エージェントを利用すれば、迅速に許可が下りるが、手数料は信じられないほど高額である。そこで、私たちはエージェントを使わずに、地元の歴史家サイオントウンさんにガイドを頼むこととした。

#### 旅の起点 ヤンゴン

4月1日(土)から4日(火)まで、私たちはヤンゴンに滞在した。シャン語では、ヤンゴンはタクンと呼ばれる。蝦の港という意味である。4月2日(日)にバギー(ベギー)まで足を伸ばした後、翌日にはヤンゴン郊外ピヤイ路沿いのカーオラック村にあるシャン人の集落を訪ねた。カーオラックはタイ語では、9番目の道標を意味する。かつてこの村がヤンゴンから9番目の道標付近に位置していたことを物語る。英領期に、ヴィクトリア女王がこのあたりの土地をシャン族に与えたと伝えられており、今では、シャン族とミャンマー族が雑居している。

私たちは、カーオラック寺に赴き、サイサンアイ氏と話をした。氏は、シャン語やシャン文化に明るく、この周辺のタイ系の集落について多くのことを教えてくれた。驚いたことに、ブミボン現タイ国王の姉にあたるカンラーニワッター妃が、この寺に参詣し、多額の寄進を行ったことがあるという。そして、この寺にはヤン

ゴン・シャン文化協会というものがある。そのメンバーと懇談し、歴史や伝説について話し合った。寺の向かいには、小さなシャン語出版社を見かける。編集長はカーオラック村の前村長のご子息で、シャン語の書籍を数多く刊行している。彼によれば、出版前には印刷原稿をミャンマー当局に提出し、その検閲をくぐらなければならないという。当局は、反政府的な動きを奨励するようなことが原稿に書かれていないか確認する。出版許可が下りなかったシャン語書籍もかなりの数に上るといふ。出版社で、コンタイティンペンディン(郷土を捨てたタイ族)という原題の、タイ語からシャン語に翻訳された書籍を見かけた。著者はサンヤボンブラシットであり、この原書は広く読まれている。しかし、訳書の題目は、「別離」を意味するシャン語の「ヤン」に変えられていた。

#### マンダレーにて

4月4日(火)には、ヤンゴンを離れ、マンダレーに向かった。バギーからマンダレーへの道路沿いに、シャン族の集落が散在している。トジョイ・インという小さな集落にある古いシャン系の寺院に立ち寄ったが、住職はシャン人ではなく、ミャンマー人の僧侶であった。この僧侶に、シャン語ができるのかと尋ねると、照れくさそうに今勉強中だと答える。

18時間後に、マンダレーに到着する。翌日には、ティンマウンジー博士と面会する。この人は医師であるが、同時に泰緬交渉史に関心を寄せている。そしてそれだけでなく、ヨディア人と呼ばれる、かつてのタイ・アユタヤ朝の遺民である。1569年と1767年に、それぞれ当時のミャンマーのタウングー朝とコンバウン朝に、アユタヤ朝は2度にわたって攻め滅ぼされている。そ

の際に多くのアユタヤ朝の臣民が、マンガレーに虜囚の民として連れてこられた。現在でも、その末裔がマンガレーとその近郊に住んでいる。ただ、ミャンマー人とヨディア人との混血が進み、もはや両者の区別をするのは難しい。ティンマウンジー博士は、このヨディアの文化を調べているという。アユタヤ朝の滅亡時に、当時のミャンマー人が、チェンマイから持ち帰ってきた経典や、ソクラーン（撥水節）の際にヨディア人が作る砂のパゴダのことなど、博士の話はとても興味深かった。博士は、さらにラーマヤナの主役の頭を祭ったラーマ神社に連れて行ってくれた。今でもヨディア人は、この神社に詣でるといふ。また、ウトンボン王の墓所にもお参りする。ウトンボン王は、アユタヤ朝最後の王であるエーカタット王の弟にあたる。ウトンボンは、兄のエーカタット王よりも先に即位するが、後にエーカタットに譲位し、後に仏門に入った。アユタヤ朝が滅びた際、ミャンマー人はアユタヤ朝の臣民をミャンマーに連行するが、ウトンボンはその中の一人であった。ミャンマーで囚われの身となっているときも、ヨディア人はウトンボンを敬愛したと伝えられる。ウトンボンが逝去した折には、見事な墓所が建立されたが、しかし今ではミャンマー政府によって放置されている。しかし、この墓所にはタイ人観光客が多く訪れる。ティンマウンジー博士は、ヨディア人の集落や砂のパゴダに案内してくれる。ここにもタイ人観光客がいずれ訪れるようになると思う。

#### 国道3号線を北上

翌日から、国道3号線に沿ってシャン州北部へと向かう。シーポーに4月7日（金）から9日（日）まで滞在する。シーポーでは、チャオ・ミャオ・セットさんの話を伺う機会を得た。この人は、バンチョップ博

士が著した旅行記「シャン州のタイ集落紀行」にも登場する。しかし、すでに80歳をこえる高齢のためか、-チャオ・ミャオ・セットさんのアルバムには、バンチョップ博士が進呈した写真が収められていたにもかかわらず-彼女はバンチョップ博士に関することは何も憶えてはいなかった。それから、私たちは、ホーカム（黄金の屋敷）と呼ばれる、シーポーの領主の屋敷を訪れ、そこで、チャオサムフォンさんの話を聞く。彼女は、ムアンヤイの領主の娘にあたる。バンチョップ博士は、調査行の途中でムアンヤイに滞在した折に、その屋敷に寝泊りした。そこでバンチョップ博士は、私たちがいま解読を試みているシャン年代記の写本を入手したのである。ただ、チャオサムフォンさんも、当時はまだ幼く、タウンジーの修道院に入っていたために、バンチョップ博士のことはよく思い出せないという。帰路につく前に、私たちは、バンチョップ博士が、旅行記の中で、ムアンヤイの領主と領主夫人ならびに屋敷内の暮らしについて触れた部分の写しを彼女に進呈した。

4月9日（日）に再び国道3号線を北上し、ラーショーに入る。ここは中国雲南省から入ってくる物資が集散する要衝の地である。ホテルや商店があちらこちらに見受けられる。地元のシャン文化協会の代表が紹介の労をとってくれて、郷土研究者との会合を持つことができた。後に、シャン族の伝統医療を執り行う医師で、民間史家をかねるルンサンサームさんの自宅で、郷土史に関する意見交換

を行なう。次の目的地は、センウィーである。本稿の冒頭部分でも述べたように、ラーショーより先に進むためには、ミャンマー当局の許可を取らなければならなかった。センウィーの手前にある検問所で許可証を提出する。センウィーは小ぶりな町である。かつての領主の屋敷跡へと向かう。この屋敷跡は見事な建築という事で知られていた。しかし、跡地にはセンウィー・シャン文化協会の看板以外何も残されていなかった。

4月12日（水）の午後に、ムセへ向かう。撥水節の期間中、ここに滞在する。宿の事情も悪くない。地元の民間研究者の数も多く、やはりシャン文化協会がある。民間研究者の何人かは、シュウェリー江（マオ河）の対岸にある雲南省端麗に住む。ムセには、ミャンマー領と雲南省の境界線をわかつフェンスがある。近隣の住民は、旅券を提示して通行料を支払えば、この境界線を行き来する事ができる。撥水節の期間中の往来は、自由である。

4月13日（木）には、一日を費やしてツェンラーンを訪れる。ここは、ムセから7マイルの距離にあり、ムンマオ王国史上



カーオラック寺そばの出版社にて、レーヌー講師とチャイヌット編集長

の英雄であるスアカンファー王の治世に王都であった。ツェンラーンのシャン文化協会の会長が、古い市街の廃墟や、スアカンファー王の聖なる井戸と呼ばれる井戸や、古い市街地の柱跡に案内してくれる。また、中緬国境を見るために、ドイテムアン山にも登る。こういった場所の地理を見てみると、シャン年代記に記されている各都市のことがよくわかるようになる。ツェンラーンは、シュウエー江の岸上にあり、この地理的条件は昔日の王国にとって有利なものなのだろう。ここでは、幸いな事にパンチョップ博士のことを記憶している人にあうことができた。ソイセンチャンタさんとその夫人であり、案内をしてくれているツェンラーンのシャン文化協会会長の両親にあたる。偶然の出会いだったが、パンチョップ博士についての興味深い話をいろいろと聞かせてくれた。お二人の自宅は、ツェンラーンの市場の前にあるのだが、パンチョップ博士は毎朝好んで市場を訪れ、お茶を飲んでいったという。

シーポー、ラーショー、ムセでは地元の民間研究者や民間史家と多くの会合を持ち、シャン史とシャン語について疑問をただし、議論をする。また、多くの時間を割いて、シャン年代記に現れる解読困難な語彙についても話し合った。

4月14日(金)には、シャン州北部とカチン州の州境にあるナムカムまで足を延ばす。ここはカムボン川が流れる美しい小都市である。ここでも民間研究者との会合を行った。ナムカムが私たちのシャン州調査行の最終地点である。

この後、4月15日(土)から18日(火)までかけて、陸路ヤンゴンに戻り、20日(木)にミャンマーを離れることとなる。(原文英語、本多史朗編訳)

## 2000 年度助成対象者決定

### - 助成金贈呈式開催 -

9月20日に第93回理事会が開催され、2000年度助成のうち研究助成をはじめとするプログラム220件合計3億3,507万円の助成が決定した。既に6月理事会で決まっている分とあわせて237件合計3億7,947万円の助成が採択されたことになる。

また、10月27日には、新宿のセンチュリーハイアットホテルにおいて助成金贈呈式が開催され、木村尚三郎理事長より各助成対象者に目録が贈呈された。以下、各プログラムの概況について紹介する。

#### 研究助成プログラム

76件 1億9,364万円

昨年度同様4月1日から5月20日にかけて公募を行い、過去最多1,016件もの応募があった。今年度は、課題1ならびに課題2のテーマを変更し、基本テーマ「多元価値社会の創造」のもと(1)多様な諸文化の相互作用：グローバル、リージョナル、ローカル(2)社会システムの改革：市民社会の発展をめざして(3)これからの地球環境と人間生存の可能性(4)市民社会の時代の科学・技術の4つを重点課題として掲げている。

選考委員会での選考を経て個人研究(研究助成A)のカテゴリーで42件、合計4,962万円、共同研究(研究助成B)のカテゴリーで34件、合計1億4,402万円が助成対象として採択された。

採択率は、全ての課題で8%を下回っている。申請数が増えたこともあり例年以上に厳しい競争となった。

全般にユニークな申請が増えている一方で新しい手法を提示している研究が少ないといった指摘が多くの委員からあげられた。来年度以降の申請には、方法論や手法の面でも斬新な申請があることを期待したい。

#### 東南アジア国別助成

63件 508,100ドル

例年通り東南アジア地域を対象に、「現代社会の文化の諸課題」をテーマに現地の研究に助成する。打診は、通年でを行い、本年度は、400件を超える打診があった。この中から、財団の主旨に合致するものを国別検討会で予備選考し、さらに選考委員会での審査を経て、理事会で上記の通り助成が決まった。

国別では、カンボジア7件、インドネシア17件、ラオス7件、マレーシア2件、ミヤ



助成金目録を贈呈する木村理事長

ンマー(ビルマ)1件、フィリピン7件、タイ5件、ベトナム17件となっている。本年度からミャンマー(ビルマ)国内の研究者への助成を開始し、1件が助成対象となった。今後の展開を見守りたい。

#### インドネシア若手研究助成

41件 3億1,625万ルピア  
(約39,000ドル)

今年度は、「固有文化・歴史の再構築」、「変化する社会の学術的分析」という2つの基本テーマのもと修士・博士課程への公募を行い、460件の応募があった。ジャカルタで開催された予備選考、選考委員会を経て、修士論文執筆のための研究が27件、博士論文のためのもの14件の助成が決定している。

選考委員会では、これらの若手研究者の手による自由で独創的な研究の実施を望むとの意見があげられた。

#### 「隣人をよく知ろう」

##### 翻訳出版促進助成

日本向け 9件 1,574万円

アジア相互間 19件 106,600ドル

東南アジア、南アジア諸国間の相互理解を目的として、歴史、人文、政治、経済、文学など幅広い分野の書籍の翻訳出版に対して助成を行う。

日本向けには、13件の申請があり上記のとおり助成が決まった。対象は、インド、インドネシア、ミャンマー(ビルマ)、ラオス、カンボジア、ブータンの人文社会科学および文学作品である。

また、アジア相互間では、南アジア、東南アジア各国より42件の申請があり人文・社会科学書、文学書等の書籍への助成が決まった。国別では、インドネシア2件、マレーシア1件、ミャンマー(ビルマ)1件、モンゴル1件、ネパール4件、パキスタン3件、スリランカ1件、タイ6件である。今

年度特筆すべきは、南アジアからの申請で採用になった8件のうち4件が女性作家の作品であった点である。今後翻訳出版を通じた相互理解がアジア女性のエンパワーメントにつながることを期待される。

#### 計画助成

11件 4,928万円

計画助成は、財団のイニシアティブに基づく非公募のプログラムで、財団内部における検討を経て理事会で決定される。今回は、「NPO / NGOに関する税・法人制度の改革に向けた取組み」(代表松原明)などへの助成が決まった。

#### 贈呈式

贈呈式では、はじめに研究助成、東南アジア国別助成、インドネシア若手研究助成、隣人をよく知ろうプログラムの各選考委員長から選考経過、助成決定プロジェクトに対するコメントをいただいた。また、今年度は、研究助成A(個人研究)の助成対象者2名より自身の研究計画についての講演が行われた。森村成樹さん(林原自然科学博物館)からは、博物館における野生動物の「行動展示」という新しいとりくみについて、本谷裕子さん(日本女子



森村さんの所属する博物館のチンパンジー

大学)からは、グアテマラの織物についての調査の紹介がなされている。

森村さんの講演の最後には、氏の所属する博物館にいる4頭のチンパンジーのスナップが映し出され、そのユーモラスな姿は、緊張していた会場を和やかな雰囲気に変えた。続いて、本谷さんがグアテマラの伝統衣装を着て登場。後帯機という原始的な機で織られたその織物の美しさ、紋様の複雑さに驚きの声をあげる参

加者も多く、講演終了後には、織物を間近で見たいという参加者が本谷さんを囲んでいた。

なお、贈呈式終了後には、懇親会が開催され、先日文化功労者に選ばれた、隣人をよく知ろうプログラム選考委員長である石井米雄先生(神田外語大学学長、トヨタ財団理事)に花束が贈呈された。



後帯機で布を織るナワラ村の女性

## 環境助成プログラムを開始

### トヨタ自動車株式会社との共同で3ヶ年計画

トヨタ財団では、2000年度よりトヨタ自動車と共同で「環境助成プログラム」を開始した。助成総額は6億円で、年間約2億円の助成金を3年間、2002年度まで実施する予定である。

当プログラムは、トヨタ自動車が1999年度国連環境計画（UNEP）「グローバル500賞」を受賞したことを記念して立案された。同賞は、「持続可能な発展」のための環境保護および改善に功績のあった個人、団体に与えられる賞である。今回の受賞は、トヨタ自動車による量産型ハイブリッド車の発売、環境マネジメントシステムの構築（ISO14001への対応等）環境情報の開示などの、環境問題への積極的な取り組みが評価されたものである。

トヨタ財団は当助成プログラムの事務局として、「グローバル500賞」の基本理念である「持続可能な発展」を念頭に置き、以下の考え方をプログラム作成に際しての基本コンセプトとした。

- ・21世紀が真に豊かな社会として健全に発展していくためには、環境と人間の生活との調和が不可欠であること
  - ・次の世代に対して豊かな地球を引き継ぐ責任があることを認識するとともに、環境問題は国境を越えた人類共通の課題であるとの認識で解決にあたる必要があること
  - ・地球環境問題に対しては、地球規模の視野を保ちながら、それぞれの地域特性を十分考慮に入れた活動を着実に進めていくことが重要であること
- これらの基本コンセプトにもとづき、「持続可能な発展のための社会投資」を基

本テーマとし、以下の分野における、地域に根ざした実践型プロジェクトへの助成を行うこととした。

#### 1) 「環境技術の事業化」分野

環境と経済発展の両立を目指した技術の事業化や事業化に不可欠なシステムを構築するための、いわゆるインキュベーターとなるような助成

#### 2) 「次世代の人材育成」分野

持続可能な発展の実現を担う次世代を中心とした人材の環境意識高揚、および環境へ配慮した行動の提唱・実践のための教育・啓発関連事業への助成

今年度は5月下旬より広く申請を受け付けた。申請期間は約6週間であったが、

100件をこえる申請の打診があった。ただし、先のプログラムの基本コンセプトに照らし、申請打診者と事務局とのコミュニケーションの結果、申請にいたった案件は計30件程度であった。これらについては事務局より必要に応じて専門家に評価を依頼するなどの準備を進め、8月下旬の当プログラム選考委員会（中村桂子選考委員長以下7名：氏名後掲）において、表にある9件を助成対象に決定した。

選考委員会では、選考に先立って中村選考委員長より挨拶があり、今回の共同助成プログラム実施に言及し、困難なことも多いかもしれないが、トヨタ自動車とトヨタ財団の「ハイブリッド」な（評価が高いトヨタ自動車のエコ・カーを指して）結果がうみだされることを期待する、との発言をいただいた。

選考は「環境技術の事業化」分野から行われた。まず事務局より審議案件について

## トヨタ環境助成プログラム 初年度助成対象プロジェクト

### 1) 技術分野

- 1 ミャンマーのワにおける高品質高収量稲作とバイオガス統合利用の促進プロジェクト  
持続可能な発展のための南北研究所(中国)
- 2 持続可能な自然資源利用に向けた地域住民の資源管理能力向上プロジェクト  
ブレット・ナイ・コミュニティー・サポート・グループ(タイ)
- 3 ベトナム農村地域再生エネルギーの生産及び環境保護を目的としたバイオダイジェスターの開発プロジェクト  
農村地域研究開発センター(ベトナム)

### 2) 教育分野

- 1 東欧の中学生及び教師を対象とする環境啓蒙プログラム  
地域環境センター(ハンガリー)
- 2 米国の小学生対象の植樹活動を通じた環境プログラム  
国民「植樹の日」財団(アメリカ)
- 3 ベトナム政府環境関係者を対象とした環境啓蒙プログラム  
環境調査、教育、開発センター(ベトナム)
- 4 環境と開発のためのリーダーシップ・プログラム  
LEADジャパンプログラム(日本)
- 5 岩手・風と森の学校; 廃校再利用ネットワークづくりのための実践プロジェクト  
岩手県こども環境研究所(日本)
- 6 自然体験活動における指導者養成プロジェクト  
(社)日本環境教育フォーラム(日本)

て説明が行われ、その後選考委員の審議の結果、3件が採択された。いずれもプロジェクト実施地における文化、社会、経済的な地域特性が考慮されている点が選考委員に高く評価された。

次いで「次世代の人材育成」分野で同様の審議が行われ、6件が採択された。いずれも若年層もしくは官民の実務家を対象としており、将来的な成果が十分期待できるとの評価であった。ただし、助成期間は単年度とし、継続助成については成果をもとに再度審査することとなった。

今年度は、初年度ということもあり環境技術の助成分野において、アジアをフィールドとする助成プロジェクトが採択される結果となったが、次年度以降は地域的なバランスも考慮したいとの意見が選考委員よりあった。来年度に向けての課題としたい。

なお、2001年度は、4月の1ヵ月間を申請期間とする予定である。申請希望者は、トヨタ財団事務局（「グローバル500賞」環境助成プログラム係）まで問い合わせいただきたい。（田中記）

選考委員氏名（敬称略）

- 中村 桂子 <委員長>  
JT生命誌研究館 副館長
- 小倉 紀雄  
東京農工大学大学院農学研究所 教授
- 細田 衛士  
慶応義塾大学経済学部 教授
- ピーターソン・マイヤーズ  
アルトン・ジョーンズ財団(米国) 代表
- ゲラン A. ピアソン  
持続可能な発展のためのベラージオ・フォーラム(ドイツ) 理事
- ソムサック・スクウォン  
アジア地域コミュニティフォレストリー研修センター(タイ) センター長
- 木村 尚三郎  
トヨタ財団 理事長
- 張 富士夫  
トヨタ自動車(株) 取締役社長

## 環境助成プログラムの フィールドから

このほどトヨタ環境助成プログラムの助成対象となったプロジェクトの中から、ひとつの事例としてタイのプレット・ナイ・コミュニティー・サポート・グループによる活動を紹介したい。

場所は、バンコクからシャム湾を南東に300kmほど下ったカンボジア国境に近い沿岸の村、Pred Nai である。ここはかつて広大なマングローブ林があり、豊かな森林と水産資源が安定した暮らしを支えてきた。しかし、企業による森林伐採が進み、とりわけ80年代からは森林を切り開いてのエビ養殖池造成で、急速に環境の劣化が進行した。このプロセスに日本の商社や、エビを好む日本人の食生活が決定的な影響を与えていることは、最近ではわりに広く知られている。

村人は近年の水産資源の減少に気づき、それがマングローブ林の破壊によるものと考えている。それは最新の生態学研究

の知見とも一致するものである。そこで、バンコクに拠点を置くRegional Community Forestry Training Center (RECOFTC)の協力により、住民自らが資源管理能力を身につけ、自然を維持しつつ生活向上をはかれるような適正技術の開発に取り組むことにした。

適正技術といっても工学的な技術ではない。農学的あるいは生態学的な自然資源管理の方法といった意味である。例えば、上海蟹に似たガザミというカニの産卵時期・場所を同定し、その時期の漁を禁止するとともに、産卵場所の保全をはかり、さらに植林を通じて周辺環境の安定度を高める、といったアプローチである。その過程では地域住民の固有の知恵を最大限に活用することが重視される。

今回、RECOFTCのメンバーとともにプレット・ナイとその隣の漁村を訪ね、村の概況や村人たちの勉強会の様子を見せてもらった。プレット・ナイ村の人たちは、かつてマングローブ破壊を進める開発資本を実力阻止した実績も持つという。会合からもそのような前向きな姿勢を感じた。

（久須美記）



左：プレット・ナイに隣接する漁村。カニ漁を終え村に戻ってきた船。ここから200メートルほどでシャム湾に出る。



右：プレット・ナイ村の集会所。村では、漁業資源、森林保全、共同貯蓄などいくつかのテーマでグループが組織され、それぞれに活発な勉強会が行われている。

## 第1回国際天然薬物資源 シンポジウム in ネパール

2000年11月8日(水)から10日(金)の3日間にわたって、ネパールの首都カトマンドゥで、ヒマラヤの薬用資源植物の保護と活用をめぐる標記国際シンポジウムが開催された。

これは、95年度の個人奨励研究助成を受けて渡辺高志氏(北里大学薬学部附属薬用植物園助手)が行った、「ヒマラヤ地域の天然有用植物資源の探索・保存に関する基礎研究」と題する研究成果の地元への還元を主なねらいとして企画されたものである。

ヒマラヤ地域は気候風土の多様性に富み、そのため特にネパールは7,000種におよぶ植物が自生する植物資源の宝庫として知られている。84年以來の渡辺氏の長年にわたる調査では、このうち1割にあたる700種が薬用植物として、古くから地元の伝統医療の中で活用されていることが明らかとなった。しかし一方で、乱獲や、開発に伴う環境変化などでいくつかの種においては絶滅が危惧される状況も生まれている。ネパールにとって、豊富な植物資源を文字通り「資源」として位置付け、その保全と持続可能な活用をはかることは緊急の課題であり、今回のシンポジウムもネパール政府に対しそのための今後の具体的な方策を提言することがひとつの目標とされた。

日本側は、渡辺氏を含め、この地域での研究蓄積を持つ研究者によるヒマラヤ地域天然薬物資源研究会(高野昭人代表)が実行委員会を組織し、ネパール側は森林土壌保全省の下にある植物資源局が中心となり、日本・ネパールの協同で企画が

進められた。

会議には、日本側から製薬会社の研究員など総勢40名が参加し、また、ネパール側からは政府関係者、民間企業、NGOなど250名以上が出席した。開会にあたり、ネパール外務大臣、日本大使などの出席を得たことも会議の重要性を示している。事前のプレスリリースでは50名もの記者が出席し、テレビ、ラジオ、新聞などを通じて広く報道された。

3日間の会期を通じて、4つのテーマに34件の口頭発表、それに38のポスター発表が行われた。4つのテーマとはすなわち、A) 政策・法制、B) インベントリーと研究開発、C) 保護と持続的利用、D) 産業化・商業流通などの活用、である。1件あたり15分という限られた時間での発表であったが内容はいずれも濃いものであった。

3日目には、森林土壌保全省のピスタ事務次官が議長を務め、4人の招待講演者による特別報告が行われた。最初はアメリカのスミソニアン研究所植物研究部長であるJ. クレス氏。生物多様性条約の趣旨や、知的所有権としての薬用植物などに言及し、今回のシンポの主題であるヒマラヤの薬用資源の保護と活用の重要性を強調した。ついで、三共株式会社の秋山敏行氏が、抗潰瘍薬の14年におよぶ開発経緯を例に、植物探索から製薬までの過程を紹介した。3番目はスリランカのペラデニア王立植物園のスミトラアラッチ園長で、ネパールと同じ途上国の立場から植物園の活動内容や役割について紹介があった。4番目は日本大学教授で牧野植物園長を兼任する小山鐵夫氏。氏は世界各国でフィールド経験を持つ植物分類学、資源植物学の専門家で、実は今回の企画には最初の段階から協力をいただいている。小山氏からは植物資源ナショナリズムのマイナス面に言及した重要な指

摘が行われた。すなわち、1993年に締結された生物多様性条約では、資源ナショナリズムが植物学研究を阻害しないように、生物多様性の「保護」とその「持続的開発利用」を倫理・経済両サイドから達成することが意図されていたが、途上国では「保護」の名目で研究利用のための植物材料に対しても不当な対価要求が行われ、そのため「開発利用」という、条約のもうひとつのねらいが活かされていないということである。このような状況を打開するために、資源植物利用について「研究ステージ」と「産業化ステージ」とを明確に分け、研究ステージにおいては資源国と研究先進国との間の協定に基づき研究成果をシェアし、また産業化ステージでは契約により資源国に経済利益が還元する仕組みをつくるのが重要であるという提言がなされた。

3日目の午後は、前述の4テーマに即してグループ別討論が行われ、最後にその結果にもとづき提言がまとめられた。その骨子には、基礎調査と応用開発の両面の必要性、現地住民の知恵を活かし、利益も彼らに還元されるような仕組みの重要性などが盛り込まれている。この提言は、閉会式において植物資源局のピスタ局長より、メインゲストである国家計画委員会の副議長リガル氏に手渡されたが、今回の会議の内容や参加者などから考えて、これは単なる儀式ではなく、実効性のある提案として受け取られたものと思われる。[久須美記]



## 市民社会の発展をめざし、充実した対話が展開

### - CIVICUS とのワークショップを開催して -

はじめに

CIVICUSは、市民社会の発展をめざし、世界各国における市民社会組織(Civil Society Organizations : CSO)の推進に寄与することを目的に、1994年に結成されたCSOのグローバル・ネットワーク組織である。昨年のマニラにおける世界大会に続いて、来年秋にはカナダ・バンクーバーにて第4回の世界大会が予定されており、世界各地からNPO/NGOや財団関係者およびフィランソロピーの研究者達が参集する予定となっている。

会員は現在、各国におけるCSOのナショナル・センターを中心に500団体を超えているが、従来、日本および東アジア、東南アジアからの参加には今ひとつ不十分な状況があり、これら地域におけるCSOからの積極的な参加が今後期待されている。

そのような背景もあって、CIVICUSは本年第2回目の理事会をこの11月2 - 3日に東京で開催することを決定、あわせて日本のCSO関係者との「対話」を申し入れてきた。そこで、これに応えるワークショップを実施することを目的として、トヨタ財団を中心に、日本のCSO関係者による実行委員会を形成し、その企画・運営を行うこととなった。

密度の濃い報告と活発なやりとり

さて、ワークショップは、11月1日(水)の午後1時より、「CIVICUSとの対話：日本の市民社会、世界の市民社会」のテーマのもと、80名を超える参加者を迎え、国際文化会館・講堂(東京・六本木)にて開催された。CIVICUS側からは、インド、英国、エジプト、オーストラリア、カナダ、ケニ

ア、ニュージーランド、フィジー、米国、モナコ等、総勢25名の理事が参加した。

開会に当たり、当財団の黒川常務理事より趣旨説明を兼ねた歓迎挨拶が、そして、CIVICUS事務局長のクミ・ナイドゥ氏よりCIVICUSとそのミッションについての説明が行われ、本題に入った。

<ジャパン・セッション1>

日本の市民社会を取り上げたこのセッションでは、最初に、田中直毅氏(21世紀政策研究所・理事長)より、「日本の市民社会のゆくえとNPO」と題する基調講演が行われた。グローバル化の急進展によって引き裂かれる国民国家と国民経済の現状、その一方で直面しつつある高齢化社会の問題、そのような状況下でのNPOの役割の増大とインターネットによる新たな市民参加手法の重要性についての指摘がなされた。

次に、山岡義典氏(日本NPOセンター・常務理事/事務局長)から、「日本におけるNPOの現状と今後の方向性」に関わる解説が行われた。発達の遅れた日本の市民活動だが、80年代に入って活発化し、95年の阪神淡路大震災では、ボランティア等、民間による目覚ましい活躍が社会の注目するところとなり、そのような状況が98年のNPO法(特定非営利活動促進法)の実現につながった。また、NPO法も含め、公的介護保険や地方分権一括法の施行など、昨今の日本では、多くの社会制度が改革の途上にあるが、このような動向はNPOの重要性をより大きなものとしていく。同時に、行政(とりわけ地方行政)および企業との連携もNPOにとっては重要な課題となってきているが、それにつけても、NPOの経済基盤を強化するための税制の実現

が早急に望まれる。などとする問題提起があった。

<ジャパン・セッション2>

休憩を挟んでのセッションでは、「日本の市民社会と国際協力」を柱に、成り立ちや経緯の異なる3つの団体の代表より、事例報告が行われた。

まず、谷口奈保子氏(ぱれっとを支える会・代表)からは、知的障害者が地域で自立していく手段として始めたクッキーづくりが、今ではスリランカの障害者に働く場を提供しつつあることが報告された。熊岡路矢氏(日本国際ボランティアセンター<JVC>・代表理事)は、難民救援から開発協力、そして提言活動へと、JVCの活動が変化してきた経緯とその理念について報告を行った。また、大西健丞氏(ピース・ウインズ・ジャパン・主任調整員)からは、国際緊急援助におけるNGO、経済界、政府の新たな協力システムとしての「ジャパン・プラットフォーム」について、その仕組みと狙いについて報告があった。

<ダイアローグ・セッション>

最後のセッションでは、北沢洋子(アジア太平洋資料センター・顧問)をコーディネーターに、主として1) NPO/NGOの資金および人材育成、2) NPO/NGOと政府や経済界との協力、3) 日本のNPO/NGOの国際的なプレゼンスについて、先の講演や報告に関する質疑やコメントも含め、CIVICUS関係者との活発なやりとりが展開された。

今回のワークショップは、様々な側面で転換期を迎えている日本社会のCSO関係者にとって貴重な示唆が得られたと同時に、海外のCSOのリーダー達にとっては、日本社会や日本のCSOの実情を体系だって把握できる機会となり、今後の本格的な交流に向け、意義ある出発点になったものと思われる。[渡辺・記]

新刊紹介

ヨム河

ニコム・ラーヤワ著 飯島明子訳  
段々社刊  
00年7.20 A5判 186頁 ¥2,100  
ISBN4-7952-6517-8

『ヨム河』(原題は『河岸は高い、丸太は重い』)は1988年度に東南アジア文学賞を受賞しており、タイの中・高等学校の副読本にも選定され、多くの読者に愛されている作品である。既にオーストラリアから英訳が出版されており、独語や仏語にも翻訳されている。

私たち日本人にとって象は動物園で「見るもの」であって、乗るものでも、ましてや生活を共にする存在ではない。しかし、訳者解説によれば、19世紀の中頃のタイでは人口50人あたりに1頭の象が飼育されており、多くの象が森林で伐採された木材の搬出に従事していたという。象はそれ程、タイの人々にとって身近な存在だったのである。

これは北タイを源流とし、チャオプラヤー河に流れ込むヨム河のほとりにすむ男と1頭の象の物語である。男にとって、象は自分の一部であり、自分は象の一部である。男は髪の毛に白いものが混ざるようになる程の歳月をかけて、等身大の木彫りの象を彫る。男は誰の中にも象が住んでおり、その象は自分で見つけ出し



て行かなければならない、と感じる。筋肉が震えるまでにあらん限りの力を尽くして重い丸太を引く象。

象鉤をあてられ、鞭でうたれる恐怖におののきながら、丸太を動かそうとふんばる姿に、男は自分の人生を重ねる。人は皆、丸太を引いて生きている、と男は思う。丸太という形骸を引いているのだと。

男の人生と共に流れるヨム河周辺の自然に対する簡潔で美しい描写は、死と隣り合わせの厳しい自然の中で生きてきた人々の姿を浮かび上がらせている。森の奥でのたゆたうような時の流れの中で、生命や人生に対する本質的な問いかけがなされる。その哲学的な深さが読んだ後もじわじわと利いてくる作品である。(R.O.)

イリアン 森と湖の祭り

Y.B. マングンウィジャヤ著 舟地恵訳  
木犀社刊  
00年7.1 四六判 374頁 ¥2,500  
ISBN4-89618-025-9

著者のマングンウィジャヤは、1929年に中部ジャワのアンバラワに生まれ、ジョグジャカルタの聖パウロ高等神学校を卒業した後に、ドイツやアメリカで学んだカトリック司祭であり、現代インドネシアを代表する作家でもあった。同時に、建築家や社会活動家としても知られる。このようにいくつもの顔を持つマングンウィジャヤだが、昨年2月に急逝したことが惜しまれる。

本書『イリアン 森と湖の祭り』は、マングンウィジャヤの代表作の一つである。スハルト体制下のインドネシア東部の辺境地帯であり、パプアニューギニアと境を接するイリアン・ジャヤを舞台として、主人公のカトリック司祭ラハディ神父の葛藤が描かれる。訳者の舟地恵氏は、歌人としても知られ、同じ著者の『嵐の中のマニャール』、『香料諸島綺談』を翻訳するなど、マングンウィジャヤ文学紹介の第一



人者である。このような訳者とインドネシア関連図書刊行に情熱を注ぐ木犀社の二人三脚で、本書の翻訳・

出版が可能になったことは喜ばしい。「隣人をよく知ろう」プログラムの助成を受けての刊行である。(S.H.)

「ターオフン・ターオチュアン」  
叙事詩の現代ラーオ語への翻訳  
と解題

ドゥアンドゥアン・ブンニャヴォン編  
ラオス国立図書館刊  
00年6 変形判 422頁

「ターオフン・ターオチュアン」叙事詩は、メコン川上流域の諸族の伝説的興亡を描いた韻文である。ラオス学の創始者として知られるマハー・シラー・ヴィーラヴォン氏が、1942年にバンコク滞在していた折にタイ国立図書館で、「ターオフン・ターオチュアン」を収めた貝葉文書(文書番号427)を発見したことから、この叙事詩の研究が始まった。

しかし、難解な古語が頻出することから、その解読には予想以上の時間が経過した。1988年にマハー・シラー・ヴィーラヴォン氏本人による翻字版が出版されたが、相前後して同氏は逝去する。その後、同氏の娘である文学者ドゥアンドゥアン・ブンニャヴォン氏を中心とするラオス人研究者のチームが、解読作業を引き継いだ。このチームは、トヨタ財団の助成をもとにヴィエンチャン、シエンクアン、フアバンなどのラオス各地の有識者とも情報を

交換しながら、解説困難な部分の意味を確定していくこととなる。その成果が本書である。(S.H.)

**A Threat to Life: The Impact of Climate Change on Japan's Biodiversity**

Akiko Domoto, Kunio Iwatsuki, Takeo Kawamichi and Jeffrey McNeely 編  
Tsukiji-Shokan Publishing Co., Ltd.刊  
00年 A4判 162頁 ¥5,000  
ISBN4-8067-1217-5

本書の編集を担当している団体、生物多様性 JAPAN は、生物多様性に関する科学者および専門家を主要メンバーとする非政府組織(NGO)である。同組織は、1997年に京都で開催された第3回気候変動枠組み条約締約国会議に先駆けて、世界自然保護連合(The World Conservation Union)との共同で4回のシンポジウムを開催した。まず東京で「気候変動と森林」をテーマに、続いて名古屋で「地球温暖化と伝染病」をテーマに、仙台では「地球温暖化と生物多様性の危機」をテーマに、そして最後は京都で「地球温暖化、湿地およびサンゴ礁の関係」をテーマに多くの専門家による報告が行われた。

こうした一連のシンポジウムにおける「地球温暖化が生物多様性に及ぼす影響」に関する報告をまとめた書籍「温暖化に追われる生き物たち」が先の京都会議で提出された。「温暖化に追われる生き物たち」の内容については海外の専門家からの関心も高く、リクエストに応える形で、新たな執筆者も加え再編集し、今回の *A Threat to Life: The Impact of Climate Change on Japan's Biodiversity* と題した英語版を刊行することとなった。

気候変動と生物多様性との相互関係については、現在までのところ国際機関でもあまりとりあげられていないが、関係

を科学的に立証することが難しいことが原因と考えられている。しかし、因果関係の立証をまっぴらでは、既に生物の進化における異常等が観察されており、手遅れになる可能性が高い。

なお、*A Threat to Life* は、*Toward a Biospheric Approach Advancing from the Intersection of the Two Rio Convention, An Overview of Climate Change from the Past to the Future, The Impact of Global Warming on Flora and Fauna* の3部から構成されている。

本書は、日本からの気候変動と生物多様性との相互関係についての貴重な情報を提供しており、先の相互関係について国際機関での議論が活発になることを期待したい。本書の出版に対しては、1998年度市民活動助成が行われた。(K.T.)

**よみがえれ生命の水**

福井県大野の水を考える会編・著  
築地書館刊  
00年8.25 B6判 358頁 ¥1,900  
ISBN4-8067-1207-8

福井県大野市はゆたかな地下水にめぐまれた地域だが、1960年代に始まった国の開発政策と融雪事業等による地下水汲み上げの増大により、井戸枯れをはじめ、市民が飲み水にも不自由する事態を経験するに至った。「大野の水を考える会」では、当地の地下水を守るために専門家の参加を得て住民自ら地下水調査の手法を学び、その実態調査や研究を行い、行政や市民に多くの提言を続けてきた。また、市民運動のみでは問題の解決が困難と考えた元代表(野田佳江)は、市議会議員としても地下水保全のための活動に精力を注ぎ込んだ。

これらの活動に関連して、85・87年度には、当財団より、活動記録の作成・出版に対して市民活動助成が行われ、その成果は『おいしい水は宝もの』(88.1、築地書館・

刊)として刊行され、地下水保全運動のモデルケースとして全国の注目を浴びた。

今回の出版は、言わば2度目の活動記録に当たり、これに対しては99年度の市民活動助成が行われた。地下水をめぐる25年にわたる住民運動の全記録が掲載されており、そこには、「現在、私たちがかかえている政治・経済的な問題が、大野という一地方都市の水問題に凝縮している」-柴崎達雄「あとがき」より-。

主な内容は以下の通り。

- 第1章 手おくれの地下水対策
  - 第2章 議会へ出て知る地方政治の実情
  - 第3章 トヨタ財団の助成と市民の調査活動
  - 第4章 名水シンポジウム開催と国の水政策転換
  - 第5章 地下水汚染と専門家の支援
  - 第6章 水源地への企業誘致計画と住民訴訟
  - 第7章 環境保全の夜明け
  - 第8章 地下水蘇生プロジェクトチームを結成
  - 第9章 古い政治体質とコンサルタント体勢
  - 第10章 合併浄化槽への取り組み
  - 第11章 大野市の上下水道政策と地下水
  - 終章 いのちの水よ、よみがえれ
- 第2部 会員の声

なお、本書は、この9月に日本図書館協会の選定図書に指定されている。(G.W.)

**もっともっともーっと神奈川!**

もっかな探検隊・編  
夢工房刊  
00年10.15 A5判 241頁 ¥1,500  
ISBN4-946513-63-9

本書は、1998年度の市民活動助成「市民発かながわの市民活動白書『(もっと)神奈川PART2』(仮称)の作成を通じた、地域課題・地域資源の把握・分析・政策提言」の成果の一部である。このプロジェクトの中心となったアリスセンター(まちづくり情報センター・かながわ)は、神奈川県を基盤とした市民活動の情報・支援センターで、93年に「(もっと)神奈川!」という書籍を発行することにより、県内

各地の市民活動の現状を明らかにし、ネットワークの形成に貢献した。

本書は、その「(もっと) 神奈川!」の改訂版で、前書を発行した経験を生かし、綿密なインタビューをもとに人・店・グループの活動や“思い”を紹介しており、単なる市民活動団体の紹介本ではなく、読み物としても充分面白い内容となっている。また、構成については、その活動内容や性格によって“ことわざ”で分類しており、楽しく興味深い。

構成は以下のとおり。

- 「冬来たりなば春遠からじ」
- 「泣いて暮らすも一生笑って暮らすも一生」
- 「ローマは一日にして成らず」
- 「我が身をつねって人の痛さを知れ」
- 「三人寄れば文殊の知恵」
- 「堪忍袋の緒が切れた？」
- 「一期一会」
- 「ちりも積もれば山となる」
- 「好きこそものの上手なれ」
- 「覆水盆に帰らず」
- 「もっかな探検隊座談会」

なお、最終章の「もっかな探検隊座談会」では、本書の編集・発行作業と並行して行ってきた、地域課題や地域資源の整理・分析の意味も果たしていると思われる。(K.S.)



## 湿地・干潟保全のリーダー 山下弘文氏のご逝去を悼む

諫早湾干潟(長崎県)を守る運動のリーダーとして、国内はもとより国際的にも大きな注目を浴びていた山下弘文氏が、去る7月21日、心不全により急逝された。享年66歳。

同氏は、1989年以降、エコプランニング研究所・代表、日本湿地ネットワーク(JAWAN)共同代表を務めるなど、全国の湿地保全運動や自然を生かした地域開発計画の立案に積極的に取り組んできた。97年の諫早湾潮止後は、諫早湾緊急救済本部・代表となり、干潟の回復運動に全精力を注ぎ込んできた。そして、98年4月には、一連の国際的功績が認められ「ゴールドマン環境賞」(米国)を受賞している。

当財団とは、時には助成対象者(市民活動助成、市民研究コンクール)として、また、時には選考委員(市民活動助成)としてなど、さまざまな形で関わっていただき、その都度、大きな示唆を与えていただいた。

さらに本年4月からは、財団の市民社会プロジェクト助成により、日本と韓国の干潟の国際調査を開始し、その中心的な役割も担ってきたところであった。これに関連し、本レポートNo.89(99年11月号)の巻頭では、「湿地保全の国際協力に向けて - 99 国際湿地シンポジウム in 和白干潟を開催」と題する報告をお寄せいただいた。今後の日韓両干潟の保全に向けた重要な調査であるだけに、ご本人はもとより、財団

としても痛恨の極みである。

山下氏のご冥福を心よりお祈りいたしますとともに、ご関係者の皆様がそのご遺志を引き継がれ、さらなる活動に邁進されますことをご期待申し上げます。

## 石井米雄神田外語大学学長の受賞

トヨタ財団理事、ならびに「隣人をよく知ろう」プログラム翻訳出版助成選考委員長をつとめる石井米雄神田外語大学学長が、このたび平成12年度の文化功労者に選出されると共に、国際交流基金賞を受賞されました。いずれも石井学長の長年に亘る東南アジア史、タイ仏教などの東南アジア研究の各部門での優れた研究業績と、日本と東南アジア間の学術交流に果たした大きな役割が顕彰されたため。受賞をこころよりお慶び申し上げます。

## 申恵半氏が 安達峰一郎記念賞を受賞

94年度研究助成(個人奨励)を受けた申恵半氏の『人権条約上の国家の義務』(日本評論社、1999年)が、このほど国際法の分野で2000年度安達峰一郎記念賞(戦前の外交官で、現在の国際司法裁判所の前身である常設国際司法裁判所の判事・裁判所長も務めた氏を記念したもの)を受賞されました。

同書は、助成により完成した学位論文をもとに出版されたもの。受賞をこころよりお慶び申し上げます。



## トヨタ財団レポート No.93

このレポートを継続してご希望の方、また住所等の変更がございましたらお葉書にて財団までお知らせ下さい。

発行日 2000年11月20日  
発行所 財団法人 トヨタ財団  
発行人 黒川千万喜  
編集人 久須美雅昭  
印刷 真友工藝株式会社